

芸術系大学の社会貢献の試み — CDRM1「医療とアート」活動報告 —

Social Contributions of Art University
— Cross Disciplinary Research Meeting Subcommittee 1ST “Medicine and Art” Activity Report —

片山 浩 KATAYAMA Hiroshi

(デザイン領域)

伊藤 孝子 ITO Takako

(音楽領域)

依田 嘉明 YODA Yoshiaki

(音楽領域)

中澤 英明 NAKAZAWA Hideaki

(美術領域)

山守 良佳 YAMAMORI Yoshika

(美術領域)

西岡 毅 NISHIOKA Tsuyoshi

(デザイン領域)

鍵野 いずみ KAGINO Izumi

(教育学部)

小田 良枝 ODA Yoshie

(浜松学院大学)

深見 麻央 FUKAMI Mao

(業務部)

茶谷 薫 CHATANI Kaoru

(芸術教養領域)

はじめに

芸術を医療や福祉の現場で活用する試みは様々な場で行われてきた。それは音楽や美術などの芸術作品を聴いたり観たりする「鑑賞」ととどまらない。患者や高齢者が比較的容易に音が出せる楽器で演奏に参加することも含まれる。初心者でも行いやすい技法で美術作品を制作することもある。このような芸術的なワークショップに精神療法的な効果があることは様々な実践を通じて報告されてきた^{1), 2)}など多数。

名古屋芸術大学（以下、本学とする）においてもその重要性は以前から認識されてきた。例えば、音楽領域（旧・音楽学部）には音楽療法士（補）も養成できる音楽ケアデザイン（旧・音楽療法）コースが設置され、日々活発な活動を行ってきた。美術領域、デザイン領域の拠点がある西キャンパスでは「芸術療法」という授業があり、芸術を通じたケアについて学生にも広く教えてきている。コースにおける専門家養成や授業展開のみなら

ず、実践的な活動もしてきた。例えばホスピス・緩和ケア病棟の入院患者のための作品制作およびその展覧会、それに関連する連続講座を実施した³⁾。

本学では学部改編及びそれに伴うカリキュラムの大幅な見直しや、教員組織の再編、コロナ禍等で、全学的な取り組みは一旦中断した。しかし、本学では「ゲイジユツのチカラ」と題する、芸術の各分野を志望する学生への教育や、教育者・保育者養成課程で培ってきた様々な資源をもとに地域・社会に貢献する目標を改めて立てることとなった。

本学では音楽、美術、デザインの各領域を芸術学部統合し、その際に新設された芸術教養領域、その後に新設された舞台芸術領域、人間発達学部を改編した教育学部を含め全学部・全領域の資源、長所を組み合わせることで、その社会貢献、地域貢献が一層進むように「ONE 名芸」という言葉の下、教育研究活動を促進させている。その一つがCDRM1「医療とアート」という2023年度の活動である。これについては、小田ら（2024）が医療や看護を必要とするこどもたちについて主眼をおき、その理論的背景および実践に至るまでの経緯、実践の概要などについて報告した⁴⁾。本稿においては、実践内容の理由について報告するとともに、今後の課題について考察する。

実践の理由および反省点

本節では実践理由について主に記す。実践の具体的な内容は小田ら（2024）に記されているのでご参照願いたい。また、本稿で施設名、氏名などを記すことは当該施設および学生などの了承を得ていることを予め述べておく。なお、本稿の本文で記した学年及び施設名等は実施当時のものである。

音楽

小田がCDRM1の取り組みに繋いだ豊橋市民病院小児科病棟デイルームにて2024年3月28日(木)15時半から45分間、依田、深見、本学音楽領域4年生野原綾乃（クラリネット）、3年生魚住風花（音楽ケアデザイン）、1年生増田凜子（オーボエ）の3名が病棟の担当保育士の見守りのもと、入院患者であるこどもたちとその保護者を対象に音と楽器での関わりを試みるため、参加型の音楽会を行った。

音楽会の内容は (a)オーボエ・クラリネット・ファゴットによる木管三重奏の演奏、(b)レインスティックやツリーチャイム等の操作が容易な楽器の体験・合奏である。音楽活動を行ったこと、演奏会ではなく参加型の音楽会としたこと、また以上のような構成にした理由を次に説明する。

深見は音楽療法士として活動をしており、今回の「医療とアート」の活動を音楽療法士的な視点で医療現場にて何らかの音楽活動ができないかを考えた。音楽療法とは「音楽のもつ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」と日本音楽

療学会では定義されている（日本音楽療学会 HP より）。今回はこの定義の中の“生活の質の向上”という面に焦点をあて、参加型の音楽会を提案した。

病棟での生活において日々患児は疾病や治療に伴う痛みや苦しみを抱えている。また感染症などのリスクから命を守るために、外界との接触も制限された状況で過ごしている。時に親子関係であっても面会や接触に制限が設けられる。院内のデイルームで音楽会を開催することで、確固とした感染対策がなされた、慣れた空間のなかで、信頼する相手と共に音や楽器を通して時間・空間・体験を共有し非日常を味わうことで生活の質の向上につながると考えた。

また演奏会というものは、演奏する者と見る・聴く者という二者間でそれぞれの役割があり、演奏者から発信された音や演出を受動的に見る・聴くということが一般的である。今回対象が入院しているこどもとその保護者であるため、それぞれの年齢や病状、身体面・精神面の負担を考慮し、(a)の演奏と(b)の体験を交互に取り入れ活動の転換部を作ったり筆者らが楽器を持ち空間を動き回ったり実際にこどもたちに操作してもらったりすることで、その場でじっと座って聴き続ける空間ではなく、自由に出入りがしたり動いたり横になったりしても気になりにくい、音を鳴らしたり会話をしているもよい空間となるよう、それぞれの状態にとって自由度が高くなるよう、参加型の音楽会とした。

改善点は、音というその場に居なくても耳にすることができる性質を上手く利用できなかったことである。病棟内には、病状によって離床制限や免疫面でクリーンルームから出られないこどもたちも過ごしている。当初の会場はナースステーション前で行われる予定であったが、日々病棟内の状況が移り変わっていく中で最終的にデイルームへと会場が移動になった経緯はあったものの、設置型の楽器だけでなく持ち運びができ奏者が移動しながら演奏できる楽器を多数用意すれば、病棟全体に音を提供することができたと考えられる。病棟という特殊な空間では常時バイタルを管理するモニター音や呼吸器の音、ナースコールなど、命に直結する音が聞こえる空間である。患児者にとっては不安や緊張感、恐怖感を感じる音であるため、楽器や音楽によって一時でも安心やリラックスできる音を提供できると良いのではと考える。一方で、医療機器のアラーム音などは医療従事者にとって命を救うための重要なサインであるため、提供する音が干渉しないように配慮する必要性もあると考えられる。そのためには事前にどんな楽器・音を用意するかを病棟へ共有し、そのうえで状況が変わった場合でも対応できるようなプログラムを作成する必要がある。

工作ワークショップ

上記と同じく豊橋市民病院小児科病棟にて2024年3月8日(金)14時半から季節のリース作りのワークショップを行った。茶谷と本学芸術教養領域2年生3名が病棟の担当保育士の見守りのもと、入院患者であるこどもたち、その保護者と折り紙リース作りを行った。

ワークショップの内容として折り紙リースを選んだ理由を次に説明する。芸術教養領域では前年の2023年12月23日(土)の午後、北名古屋市歴史民俗資料館2階会議室にて「昭和と令和をつなげるクリスマス 名古屋芸術大学×いきいき隊×昭和日常博物館連携イベント ヤロマイ昭和プロジェクト『お！ トモダチ！?』」（以下、クリスマス会）というイベントを行った。その際に、当該イベント内で実施したワークショップ（以下、WS）の一つが折り紙リースであった。クリスマス会は芸術教養領域2年生が、世代間交流や回想法・いきいき隊の広報を目的に、幼児でも参加できるイベントを考え、北名古屋市の歴史民俗資料館、回想法センター、そのセンターを中心に活動する「いきいき隊」という高齢者グループに協力を依頼し、実施したものである。そこでは折り紙リース以外に、思い出をオーナメントに書きクリスマスツリーに吊るすWS、絵本を読むコーナー、紙芝居の読み聞かせ、昭和・平成・令和の玩具で遊ぶコーナー、宝探しWSなども開かれ、50組以上、100名以上の参加者があり盛況だった。特にリース作りは、手などに障害がなければ非常に簡単に作れ、参加したこどもたちも大いに喜び、これを提案した学生が大いに手応えを感じたWSであった。リースは思い出の象徴的なものにもなり、退色した後、作り直すことも容易である。茶谷は、リース作りはクリスマス会のみならず、季節に応じて長期入院を余儀なくされているこどもたちが一時でも気を紛らわせる作業であり、退屈のぎになり、達成感を得られるものだと考えた。またでき上ったリースは、病室に飾ることで、こどもたちの心慰められるものになるとも思い、このWS実施を当該病院に提案した。

芸術教養領域2年生3名のうち、1名は折り紙リース作りを上記クリスマス会で提案し、WSの担当者でもあった春田紗英である。他の2名は同じクリスマス会で昭和・平成・令和の玩具で遊ぶコーナーを担当した鈴木美砂および、絵本・紙芝居のマネジメント担当者の片岡祐介である。春田、鈴木、片岡はいずれもクリスマス会で多数のこどもたちと対面で長時間関わり、病棟に入院しているこどもへの対応もある程度は可能であると考えられたため、参加を呼び掛けた。

病棟でのリース作りに対面で参加したのは3組で、幼児2名、児童1名であった。幼児2名は1時間以上熱心に取り組み、複数のリースやリースを飾るオーナメントに取り組んだ。改善点は、主たる参加者が傷病の治療中であることを鑑み、1名（1組）が取り組む時間を30分程度、もしくはそれよりも短縮するなど、疲労が出ないよう短時間に制限することだと考えられた。楽しく、集中したい作業は、疲れや痛みを忘れて参加してしまうことがある、という基本的なことを踏まえるべきであった。

壁面装飾用平面作品提供

豊橋市民病院にはデザイン領域生および教育（人間発達）学部生および同病院にかつて入院していたこどもの作品をラミネート加工したものを謹呈した。

片山がデザイン領域イラストレーションコースの、当時3年の工藤詩織の作品10点を選んだ。その理由は様々な状況の人が集う病院という場所の特性を考えるとイラストレーションの意味やメッセージが強くあるよりも、作品を見た人がそれぞれの方面から感情移入できる方が適当であると考えたためである。工藤の作品には声高なメッセージはないが、鑑賞者が作品を見て考える余地と安心感が得られる色彩とタッチを持つ。

教育（人間発達）学部生の作品は、鍵野が図画工作の授業等で制作させた作品のうち完成度が高く、学生が提供を了承したもの6点である。選定理由は、前述の完成度以外に、学生がこどもたちの気持ちを考えて制作されたと伝わると考えられることにあった。

かつて入院していたこどもの作品も、本人の了承を得たものである。手書きの原画複数をお田が撮影した。その画像データを茶谷がAdobe Photoshopを用い、描画された線を抽出し、A3用紙1枚に収まるように配置した。更に作品が作られた経緯を説明した文をお田と茶谷が記し、上と同じ用紙の隅に配置した。この作品については、こどもの闘病について良く知るお田が大学教員として保育者養成に携わる前には、保育者として保育所に勤務し、医療保育専門士であり、医療保育を専門としていることが深くかかわっている。このことについて以下に詳述する。

人間の五感から感じる病院内は、白い、電子音、消毒の匂い、固い、寒々したなどという印象がある。これは、清潔さ、安全性を保つための重要な要素ではある。病院は、病気やケガで受診する場所、そして入院患者が生活をする場所であり、嬉しく楽しい経験をする場所とは言い難く、閉塞的な感覚に陥ることもある場所である。

また、病院に勤務する職員にとっては、命を預かる重要な役割がある場所でもあるため、常に緊張を強いられる職場であると考えることができる。

そのような環境の中で、豊橋市民病院には、病棟と診察棟を結ぶ廊下や外来診察棟のあちこちに、絵画や書など多くの芸術作品が展示されている。診察の待ち時間や病棟への移動の際は、それらの作品を眺めながら心を和ませたり、作品の世界の中に入り空想したりすることもできる。つまり、医療とアートが共存している環境といえる。

「かつて入院していたこども」の作品は、2000～2001年に小児がんの中でも高リスクグループに入る「進行性神経芽腫」だった一人のこどもが入院生活中に描いた絵である。このこどもが絵を描きはじめたのは、入院して4か月たった2歳を過ぎたころであった。病室は、真っ白な壁面の個室である。命を懸けて治療を行う毎日の中で、こどもは生活をしていた。体調もすぐれない中、ビデオや絵本で見た「きかんしゃトーマス」や電車の絵を飽きることなく一日中描き、電車の玩具、パズルや折り紙などで遊んで過ごした。2歳8か月で退院するころには、病院で生活するこどもが描く絵とは思えないほど、のびのびと生き生きとした作品を描くようになった。

豊橋市民病院には、現在も「かつて入院していたこども」が入院していた当時から勤務している医師、看護師、保育士ほか職員が勤務している。作品を展示することで、職員に

は思い出が蘇り懐かしい気持ち、癒し、明日への希望につながるのではないかと小田と茶谷は考えた。また、長期入院していることもや同じ病気のこともたちや保護者に対しては、生活の中で楽しく過ごすきっかけ作りや病氣治癒の希望につながるのではないかと考え、この作品の制作に至った。

今回は元入院患者1名の作品であったが、この作品をきっかけに、例えば、小児科病棟の中で退院する（した）こともたちとワークショップを行うなど考えることができる。苦しく辛い経験の生活を振り返り、作品を作成することで負の感情ばかりでなく、かけがえない経験となるきっかけになるのではないかと。

しかし、医療従事者や入院している子どもや保護者にどのような変化があったのかは、今後の継続したかわりのなかで検討していく必要がある。更に、提供した側の思いだけが強かった一方的な交流にはならないように、取り組みについて客観的に熟慮する必要がある。

以上は全て、本学にある機材によるラミネート加工可能な A3サイズ以下にし、茶谷が加工した。反省点は、当初予定していた授乳スペースなど、落ち着く場所では患者や家族が集中して観てしまうとのことで、別の場所に設置された点であった。作品を提供する場合は、長期的な計画で、事前見学や打ち合わせを作家である学生本人にしてもらう必要性が高い。また、試作・試案の段階で先方のチェックを入れてもらう方が良いだろう。

絵画貸出し

三重県名張市の医療法人橋本胃腸科内科はしもと総合診療クリニックの待合室に絵画を貸し出した。趣旨に合う作品を描ける学生を美術領域の中澤と山守が選んだ。当時、美術領域洋画コース2年の堀出奏月、日本画コース3年の和久田尚希と美術総合コース3年の熊崎敦士の3人が、待合室の窓と窓の間にある柱に合う幅約50cmのサイズに合わせ、作品を描いた。堀出は2点、和久田および熊崎はそれぞれ1点ずつ描いた。額装する額は山守が選び、学生本人が額装した。

学生を選んだ理由は、「医療とアート」の趣旨に合う作品を描いてみたいという意欲を持っていることに加え、中澤と山守が日頃の教育を通じ、完成度の高い作品を作れる見込みがあると確信できたためである。

堀出の作品は、白い画面に小さな人や物が所狭しと点在して描かれている。遠目に見た瞬間、何が描かれているのか判別しにくい画面であるが、近付き時間をかけながら舐めるように視線を移すことで、描かれた事柄を発見する楽しみや、共感する喜びを味わうことができ、張りのある純白の地と濁りのない色彩と相まって、見る者の心に現実を離れた静かな一時をもたらしてくれる。以上が特に優れた点である。

和久田は制作において身近なところからテーマを拾い上げ、鑑賞者の日常に寄り添った作品の制作を行っている。日本画の顔料では難易度が高い軽やかな色を巧みに用いた作品

は、爽やかな雰囲気です。自然と鑑賞者の心をリラックスさせる。テーマに合わせたモチーフの幅も広く、病院という場における親和性が高いと感じたため、和久田に作品制作を依頼した。

その一方、熊崎の絵画は具体的なモチーフはなく、抽象的な表現を追究している。現在は白い画面の中に円を描いた作品を制作しており、円の内側は色とマチエールによる動的な感情表現、円の外側は胡粉によるマットな白色を使った静的な表現という対比を用いた作品を主としている。シンプルに仕上げることで説明を省き、それがより鑑賞者の興味を引き立てる作品となっている。熊崎にとって個人の感情という出発点ではなく、鑑賞の場に合わせた作品制作を行うことで新たな表現に挑戦する機会にもなると思い、今回制作を依頼した。

和久田の日常的なテーマを据えた視点の作品と、熊崎の鑑賞者の主観に答えを委ねる形の作品を並べてみる事で絵画というものについての多様性を知ってもらう機会になり得ると思い、今回この2人での展示を企画した。

2024年3月に、山守と茶谷が実際に全員の作品を持参し、当該クリニックの待合室で確認したところ、2点ずつ飾るのが良いだろうということになり、和久田と熊崎の作品を先に飾った。これらは2024年12月に掘出の作品と入れ替えた。

反省点としては、趣旨説明の小さなパネルなどを用意していなかったことである。掘出の作品を搬入した際に、その趣旨説明のパネルを持参し、掲示させていただいた。そのパネルの文言も当該クリニックの了承を得た。

靴箱制作

特定非営利活動法人まいゆめからの依頼で、デザイン領域スペースデザインコースの西岡、同コース助手の坂田樹、が大人用1つ、こども用1つを制作した。靴箱にはシナランバー材を使用し、棚板の設置には棚レールを使用する事により、こどもの数によって段数を変えられるように制作した。また、この棚へのペインティングを利用者のこどもたちに行なってもらう事で思い出として残っていくのではないかと西岡が考えた。それを実行するため打ち合わせをしているところである。

反省点は茶谷の連絡が遅く、また本稿最後に記すように連絡が途絶えた場合の手段を講じなかったことである。これらについては改善していく必要があると考えられる。

展覧会見学

本学西キャンパスで2024年2月に開催された第51回名古屋芸術大学卒業・修了制作展の見学を行った。

16日は社会福祉法人新城福祉会の職員（荒川淳矢氏）と利用者、合計2名を小田と茶谷が案内した。会場が広く、作品数も膨大だったため、半分も見学できなかったが、会場

当番をしていた制作者である学生本人と話をした。また記念写真撮影も行った。大がかりな作品について、利用者は非常に楽しそうな表情で声も活発に出していた。付き添った荒川氏は大いなる刺激を受けたと喜んでいて、荒川氏は当該福祉会で「一点モノ工房」という活動を提案、実施している。利用者が描いた作品を地域の会社等に貸し出す「レンタルアート」、作品をカレンダーに加工するなどした商品の販売といった活動をしている。利益は主目的ではなく、地域で社会的な活動をしていくものになっていることが重要だという。本学の展覧会見学により、利用者や職員がインスピレーションを得るという形での貢献ができると考えられた。

21日には名古屋市の特定非営利活動法人まいゆめの職員4名および利用者2名を、小田と茶谷が案内した。雨が降り、寒い日でもあったため、会場の約4分の1を見学するに止まった。しかし、後日、職員から、利用者が当日の晩、速やかに就寝できるなど、非常に良い効果があったとの言葉が伝えられた。刺激の少ない日常的に通う施設以外の場所に出かけ、アート作品に触れる経験を提供することも重要だと思われた。

上記の二施設も小田がCDRM1の取り組みに繋いだ。今回どちらの施設も、見学者は大人や大学生の年齢の方を対象とした。取り組みのきっかけは、Zoomで実際に作品を見たことや施設訪問時に「医療とアート」の趣旨説明動画を視聴してもらったことである。更に、茶谷と小田が色々な取り組みができることを提案したことから取り組みのイメージも共有でき、施設の職員が希望や願いを伝えやすい環境を作ることができた。その結果、施設の職員が主体的に活動を選ぶことができる取り組みになった。つまり、施設の職員の発想にはなかった「大学に出かける」という選択肢を設けたことで実現した取り組みである。

小田は医療保育専門士として、見学者の体調に配慮し、安全に楽しんで見学できるようにするために下見の提案を行った。施設利用者が来学する前に施設職員と茶谷、小田の両者で下見（車いすでの通行可否、緊急時対応なども含め）を行った。そのため、当日は、テーマを絞って効率よく有意義に展示を見ることができた。

上記の二施設による見学ではいずれも学生食堂を利用した。施設等では社会見学の楽しみの一つとして昼食があるが、食堂のスペースや医療的ケアに必要な電源の確保など、日ごろと異なる環境の中での配慮などが必要であり（緊急時対応も含め）、見学を受け入れる大学側の案内が複数人必要であると改めて認識した。疾病や障害の程度によっては電源が必要なものもあるため、見学などの際は食堂では電源に近い席の確保、延長コードを貸し出すなどの必要があると考えられる。まいゆめの場合は小田が会場や食堂が混みあう前に食堂に赴き、席を確保したが、それ以外の学内的なフローがあると非常に簡便で有用であると思われた。

後日、施設から連絡があり、保護者から喜びや感謝の声が聞かれたとあり、見学者のみならず家庭支援にもつながったと考える。これらの活動は、目的、ねらいにあった内容を

検討しながらも、継続して積み重ねていくことが大切ではないかと考える。

ロゴ・サイン制作

豊橋市民病院から依頼があったサイン制作、新城福祉会から依頼があったロゴ制作は今年度計画中である。後者については、上記の展覧会見学に来た職員の荒川淳矢氏に2024年度の茶谷の授業でゲストスピーチして頂き、芸術教養領域の学生に施設や活動のコンセプトや実際に聞いてもらった。芸術教養領域の学生の中にはデザインに強い関心のある学生が数名おり、ゲストスピーカーとなった職員も施設全体ではなく、その職員が責任を持つ「一点モノ工房」活動のロゴをまず制作して欲しい、薄謝ならば出せるとの依頼があったため、学生が考えているところである。

サインについてはコンセプト、活動内容だけではなく、建物・設備等の把握のための見学および打ち合わせが必要である。2024年度の予算配分を見直し、年度中の制作が可能かどうか考慮中である。

今後の展望

2023年度の活動については、小田ら（2024）が、時間的な余裕、調整・連絡の対応期限の設定、対象施設等の構造把握、本学学内での学生を含む人々の認知度向上の改善点を挙げた。2024年度は「医療とアート」を発展させ、「アートのアウトリーチ〈ゲイジユツのチカラ〉」とアウトリーチ活動の対象の幅が広がった。時間・予算等の制約はあるが、2023年度にお世話になった医療関連施設との連携活動を地道に続け、徐々に発展させていくことが重要だろう。

加えて本学は、所在地である北名古屋市の回想法センターおよび歴史民俗資料館（昭和日常博物館）とさまざまな授業および課外活動で連携してきた。回想法センターは高齢者福祉に資する回想法事業を20年以上続けてきた。歴史民俗資料館は、当館が有する資料（昭和時代の日用品など）を回想法事業に提供するなど博福連携も密である。高齢化が進むと予測されている日本では高齢者の認知症予防や地域の繋がり形成・維持していく事業は不可欠である^{5), 6)}など。本学の「ゲイジユツのチカラ」を、北名古屋市をはじめとする地域に還元することも重要である。そのためにも今回の試行は役立つと考えられる。

地道で着実な地域貢献をふまえたカリキュラムおよび授業計画、学生が参加しやすい課外活動を考え、実施していく必要もある。今後もそのことを念頭におき、活動が続けていく予定である。

謝辞

ご協力いただいた施設のみなさまに心より感謝申し上げます。またCDRM1「医療とアート」サポートメンバーの津田佳紀、萩原周両氏、CDRM1改編の契機を下さった村岡ケンイチ氏に深謝申し上げます。

本研究は本学特別研究費（課題名：CDRM (Cross Disciplinary Research Meeting) 1（医療とアート））のプロジェクト推進のための調査・提案・試行）の助成を受けて実施しました。

文献および註

- 1) 星野良一、森則夫、2005、医学のあゆみ 4. 芸術療法、医学のあゆみ Vol. 214、Issue 2、175-179、医歯薬出版株式会社
- 2) 二俣泉、白川ゆう子、三浦優佳、2019、音楽療法をまなぶ 新訂増補版、アカデミア・ミュージック
- 3) 名古屋芸術大学全学広報誌編集委員会編、2009、【特集】アートの可能性 医療・福祉と芸術、名古屋芸大グループ通信、vol. 11、2-5頁にその際の報告が掲載されている。
- 4) 小田良枝、深見麻央、茶谷薫、2024、看護や医療の必要なこどもの保育の環境の工夫ー「医療とアート」との連携からできることー、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要、第13号、47-61頁
- 5) 一般財団法人長寿社会開発センター、2019、平成30年度 多様な主体による高齢者支援のための連携実態と地域住民の参画を促すための公的支援に関する国際比較調査研究報告書、別冊 横浜報告書、国際長寿センター
- 6) 西智弘編著、2020、社会的処方 孤立という病を地域のつながりで治す方法、学芸出版社